

# 金沢経塚群の概要

藤原 正大(横手市教育委員会)

## I. 金沢周辺の経塚 (表1)

横手市内には多くの経塚が存在し、その多くは金沢柵推定地金沢城跡の周辺、特に北東方向に集中している。その金沢城跡の北東に立地する経塚は、横手市金沢地区に所在する4遺跡5基と、美郷町に所在する一字山経塚の7基、併せて12基である。この報告では、以上の経塚について「金沢経塚群」と呼称する。

これらの経塚は、明治～大正期にかけて発見状況や出土遺物についての記録が残され、古くから存在が知られていた。また、今回の報告にあたっては現地踏査を実施し、正確な位置や現況について把握することができた経塚もある。今回の報告では、先述の記録や現地踏査の情報を基に、金沢経塚群の概要を見ていきたい。

## II. 各経塚の概要 (図1)

### 1. おそのふくろきょうづか 獺袋経塚 (横手市金沢字鳥居長根 52)

中ノ目川と厨川に挟まれる、東西に長い鳥居長根丘陵<sup>とりいながねきゅうりょう</sup>の頂部に立地する。現在、周囲はスギ林となっているが、木々がなければ金沢の扇状地を一望できる位置にある。後述する老姥山経塚・直坂経塚と同じ丘陵に立地しており、3つの経塚を総称して鳥居長根経塚群と呼ぶことがある。

遺跡の発見は、明治期に金沢町立石の加藤善松・辰蔵父子が「千体仏」を発掘したことによる(奈良 1977)。経筒や経典は未確認である。現在は径約 5m、高約 1m のマウンドが残され、塚の中央には盗掘坑がある。なお、この経塚の東 1.6km には「七ツ森経塚」(菅江真澄は「黒滝経塚」と記録)と呼ばれる経塚があったとされるが、詳細は不明である(奈良 1977、内田・宮本 1979)。

### 2. おばさやまきょうづか 老姥山経塚 (横手市金沢字鳥居長根 60-1)

先述の鳥居長根丘陵の見晴らしの良い北西端部に立地する。この経塚については、戎谷亀吉(南山)が記録を残しているが、後述する直坂経塚と記述が混同している部分が見受けられる。

戎谷によれば、付近には「大小種々なる破損の古瓶掘り出たり云う」とあり、「山頂の経塚様の物より古刀剣十三及斧壺個をも腐蝕のもの」が発掘されたという。また、2尺(約 60cm)四方の石箱(角炉形)が発見され、箱の中には3寸(約 9cm)ほどの炭が敷かれており、炭の上に刀が並べられていたとの記録が残る(戎谷 1920)。経筒や経典は未確認である。現在は径約 5m、高約 1m のマウンドが残されており、塚の周囲には人頭大の石が露出している。





図1 金沢経塚群 各経塚の位置



### 3. 直坂経塚 (横手市金沢字鳥居長根 66)

先述の鳥居長根丘陵の南西端部に立地する。遺跡は、獺袋経塚と同様、金沢町立石の加藤善松・辰蔵父子によって明治22年(1889)に発見された(奈良1977)。この経塚についても、戎谷亀吉の記録が残され、経塚は直坂とよばれる山の頂上にあり、「饅頭形を為せる盛土経塚」(戎谷1920)であったという。

この経塚で特筆されるのは、鉄製経筒が出土した点である(図2左上)。経塚出土の経筒の多くは銅製であり、鉄製が出土することは稀で、貴重な出土例である。現在は後三年合戦金沢資料館に保管されており、戎谷亀吉による出土当時のスケッチが残されているが、現在は腐食が進み一部が欠損している。

### 4. 閑居長根経塚群 (横手市金沢字寺の沢 21)

厨川右岸、閑居長根丘陵の頂部に立地し、この丘陵の南側谷地には、<sup>ぎ おん じ</sup> 祇園寺がある。厨川を挟み金沢柵推定地金沢城跡の北東方向に位置する。この経塚群は1号経塚と2号経塚の2基で構成される。

#### 1号経塚

加藤善松・辰蔵父子によって明治22年(1889)に発見された。戎谷亀吉による加藤辰蔵への聞き取りによれば、発見当時の状況は以下のとおりである(横手市史から引用)。

閑居長峰の頂部に土饅頭があり、これを金槌で突き刺してみると、土中から奇怪な音がした。そこで盛土を8寸ばかり除去してみると、箕の形をした石が出てきた。棒で石を突き上げ起こしたところ、下には「井桁」形に組まれた石が現れた。井桁形の一边は2尺ほどであった。石で囲まれた内部中央には“古陶”(四耳壺)が納められており、壺と石組の間には砂礫が詰められていた。壺は四耳があり鏡で蓋がされ、銅線で蓋の鏡を絡げていた。発掘時に銅線は既に切断された形跡が見られた。蓋を開いて壺の内部を観察すると少量の“朱土”のようなものが見られただけであった。

出土遺物は、須恵器系陶器櫛目文四耳壺(吉岡編年I期)と<sup>あしかりきょう</sup> 蘆雁鏡、銅線4本がある(四耳壺と蘆雁鏡は「古鏡蓋付陶製経筒」として秋田県指定有形文化財)(図2右上)。蘆雁鏡は四耳壺の口縁部に合わせて打ち欠く細工が加えられている。銅線4本のうち1本には「ミナモト」の毛彫りが認められる。

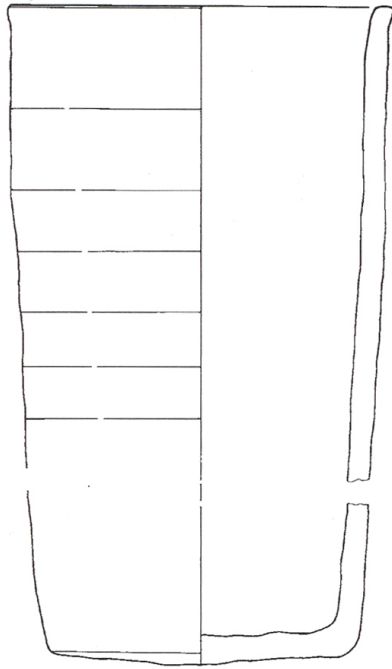
#### 2号経塚

加藤善松・辰蔵父子によって明治41年(1908)に発見された。これも同様に戎谷亀吉による加藤辰蔵への聞き取りと、奈良修介が深澤多市に聞き及んだ話が残っている。これらをまとめると以下のとおりである(横手市史から引用)。

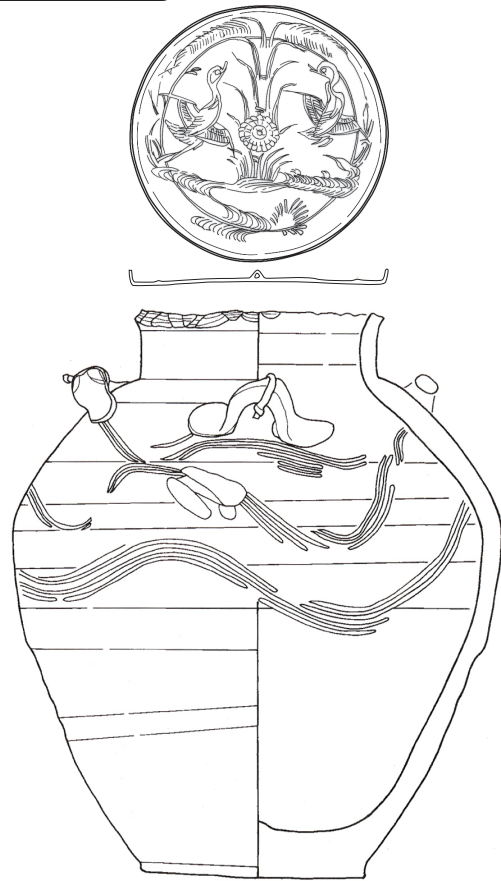
塚は盛土塚であるが、根回り7尺あまりの杉根株を掘り起こすと、内部には大きな石(径1m程)がいくつか積まれていた。中央の石には深さ3寸5分の穴が穿たれ、内部に銅製経筒が納められていた。経筒の上には、長さ2尺程の自然石が置かれていた。経筒内には紙本経が入っていた。(後略)

出土遺物は、銅製経筒と<sup>うめがえそうじやくきょう</sup> 梅枝双雀鏡がある(銅製経筒と梅枝双雀鏡は「銅製経筒」として秋田県指定有形文化財)(図2下)。このほか経典が経筒の中に納められていたと伝わる。銅製経筒は

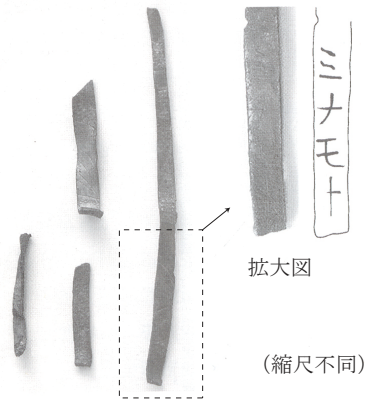
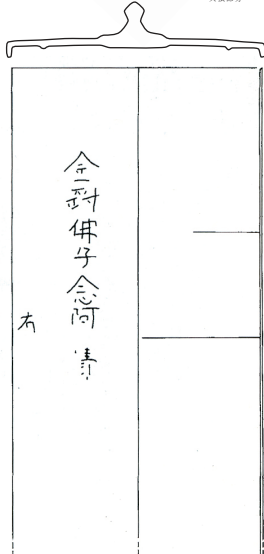
真坂経塚



閑居長根 1号経塚



閑居長根 2号経塚



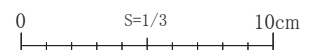
拡大図

(縮尺不同)

元又三三 歲次 四月  
 本聖人於西十培  
 金剛佛子念阿耨  
 右



図 2 各経塚出土遺物 (横手市 2007)





図のような銘があり、元久3年(1206)の年号が刻まれている。また、現在は梵字が2つ毛彫りされているが、そのうちの1つは発見後に追刻された可能性が指摘されている(横手市2007)。梅枝双雀鏡は経背の鈕が削り落とされ、宝珠状のつまみが付けられている。

## 5. 一字山<sup>いちじやまきょうづか</sup>経塚(仙北郡美郷町金沢字館ヶ沢19)

一字山と呼ばれる山地の西向きの細尾根上に立地する。この経塚群も木々がなければ金沢の扇状地を一望できる位置にある。

一字山経塚については、菅江真澄の『月の出羽路』仙北郡14巻に以下の記述がある(内田・宮本1978、仙南村1992)。

「文化四年(1807)丁卯ノ十月某日、この此六郷東根の一字山にて樵夫、山<sup>まきこり</sup>賤、石<sup>やまがっ</sup>畳を起こして掘りうがちしかば石櫃あり、そが内に、法華経を書写、納めた白銅の筒あり、筒に『仁安三年(1168)戊子二月 金兼宗』と彫りたり。その後この経とも六郷の本覚寺の境内にふたたび埋たりといえり。墨書の経ありまた血書よりの経許多あり(中略)。此一文字山は六郷東根金沢寺田の村畵に在り。」 ※括弧内は報告者が補った。

以上の記述から、仁安3年(1168)に金兼宗という人物が埋経を行った遺跡であり、石室を設け、経筒の外容器として石製の箱型容器が利用されたことがわかる。仁安3年銘は後述する横手市大森町の観音寺経塚に次いで県内では2番目に古い埋経事例である。発掘後、これらの資料は本覚寺(美郷町六郷字東高方町)に埋め戻したとされる。

現在も尾根上にマウンドが7つ存在している。石室が確認でき、人頭大の石が露出している。経塚中央に径1.5mほどの盗掘坑がある。また、経塚の所在する尾根の下には人工的な平場が複数存在することも注目される。

## Ⅲ. 横手市西部の経塚(表1, 図3)

以上で金沢経塚群の概要を提示したが、このほかに横手市西部には経塚として大森町観音寺経塚と雄物川町七ツ森経塚群が確認されている。以下でその概要を見ていく。

### 1. 観音寺<sup>かんのんじきょうづか</sup>経塚(横手市大森町上溝字観音寺126)

出羽丘陵端部の古寺山<sup>ふるてらやま</sup>山頂に所在し、眼下には保呂羽山を水源とする雄物川支流の上溝川が東流し、さらに川を挟んだ対岸には『日本三代実録』に現れる定額寺<sup>じょうがくじ</sup>「出羽国観音寺」と想定される観音寺廃寺跡が立地する(詳細は紙上報告「藤原氏関連遺跡観音寺廃寺跡」)。

観音寺経塚については、菅江真澄の『雪の出羽路』平鹿郡3巻「観音寺<sup>ものがたり</sup>由来」のなかに詳しい記述がある(内田・宮本1976)。内容をまとめると、古寺山には4つの塚があったとされ、文化6年(1809)にそのうち3つの塚を発掘したという(以下、1~3号塚とする)(図4)。

#### 1号塚

甜石<sup>あまいし</sup>(軟質の岩盤)を掘りくぼめた中に経筒を納め、その上に鞘付きの太刀を置き、周囲に川原石を詰めて大きめの石で蓋をし、その上に盛土していたようである。出土遺物は銅製経筒と太刀2点である。銅製経筒は久安5年(1149)の紀年銘があり、所在不明であるものの、秋田県で

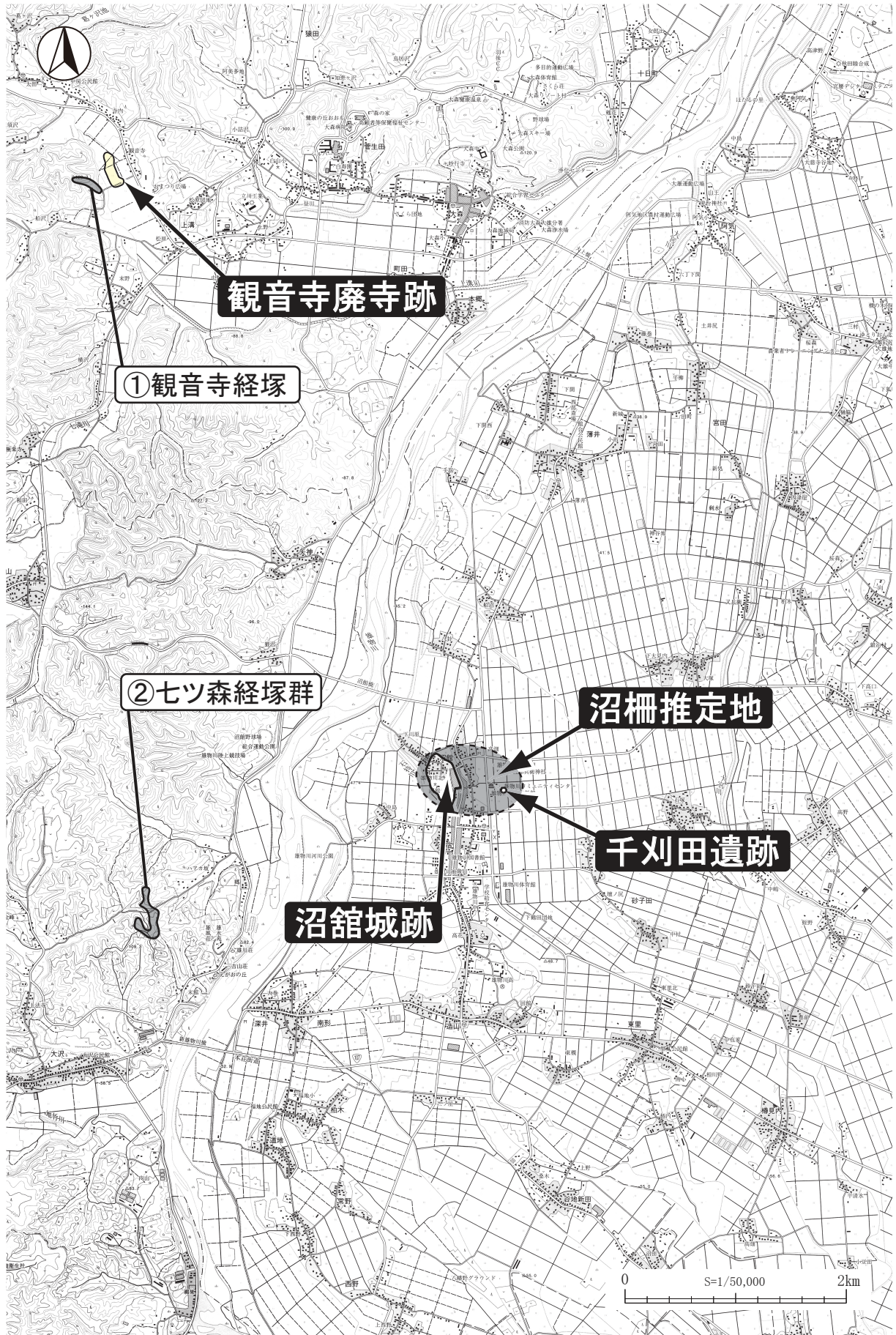


図3 横手市西部の経塚位置図





は最も古い埋経事例として知られている。

## 2号塚

遺構に関する記述はみられないが、銅製経筒と須恵器系陶器の中型壺（壺のみ現存し、「経甕」として秋田県指定有形文化財）（図4上）が出土している。経筒の中には朽ちた布切れが残っていたとされる。また壺の中には土の塊のようなものが詰められていたとされ、防湿剤の役割である可能性が指摘されている（横手市 2007）。3号塚は太刀のみが出土したと伝わるが、経塚の可能性はある。

このほか、観音寺経塚の東約4.5km、大森城東側の<sup>つるぎはなやま</sup>劔花山山頂の鹿島神社境内からは、経塚に使用されたと思われる壺と片口鉢および水晶玉が出土している。

## 2. <sup>ななつもりきょうづかぐん</sup>七ツ森経塚群（横手市雄物川町大沢字北野・今宿字ハアカ坂ほか）

出羽丘陵上の沼館地区や横手盆地を一望できる見晴らしの良い丘陵尾根頂部及び端部に経塚が点在する（図5左）。大沢森経塚と北野1～6号塚（6号塚は『横手市史』編纂に伴う現地踏査によって発見）を総称して七ツ森経塚群と呼称している。また、『秋田県史』考古編には七ツ森経塚群周辺の雄物川町上法寺から平安鏡（八稜鏡）が出土したとの記録も残る（奈良 1977）。

### 大沢森経塚

七ツ森経塚群の中で最も早く発見された経塚で、大正2年（1913）に大沢森経塚から佐藤梅治が経巻の入った須恵器系陶器の甕（図6-2）を発掘したことによる。

『秋田県史』考古編によれば、前述の須恵器系陶器甕のほか、銅製経筒小破片、紙本経10巻が出土し、そのうち1巻は朱書きであったとされる。

### 北野1号経塚（図5中央）

昭和34年（1959）に、大沢森経塚の北側尾根上で境界標を建てる際に北野1～4号塚が発見され、豊島昂によって発掘調査が行われた。

1号経塚は経塚群の北端に位置し、尾根上の平坦面（凝灰岩質の基盤層）を径14mほどの円状に切土・整地し、中央部には高40cmほどの盛土がなされ、これによって外観は2段構造を示していたという。盛土表面には拳大の礫が葺かれていた。塚の中央の基盤層に土坑が掘り込まれ、須恵器系陶器大甕が正位状態で納められ、凝灰岩の切り石で蓋がなされていた。

出土遺物は前述の須恵器系陶器大甕（図6-1）があり、12世紀後半のものと推定されている。

### 北野2号経塚（図5右）

1号経塚の南南西約80mに位置する。塚の構築方法は1号経塚とほぼ同様だが、盛土面に葺かれず、盛土中に礫が含まれる点に違いがある。塚中央部には一辺45cm、深さ70cmの方形土坑が掘られていたが、黒色土が充満していただけだったという。

出土遺物は、土坑直上から出土した凝灰岩製の石製人形12点がある。

### 北野3号経塚

2号経塚の南南東約90mに位置するが、記録は残されていない。3号経塚出土の凝灰岩製男根状石製品1点がある。現在は貯水小屋が建てられ、塚自体は消滅したと考えられる。

### 北野4号経塚

2号経塚の南西約85mに位置するが、記録は残されていない。

### 北野5号経塚

大沢森経塚の東南東約120mに位置し、雄物川町郷土資料館の開館を契機に、雄物川町教育委



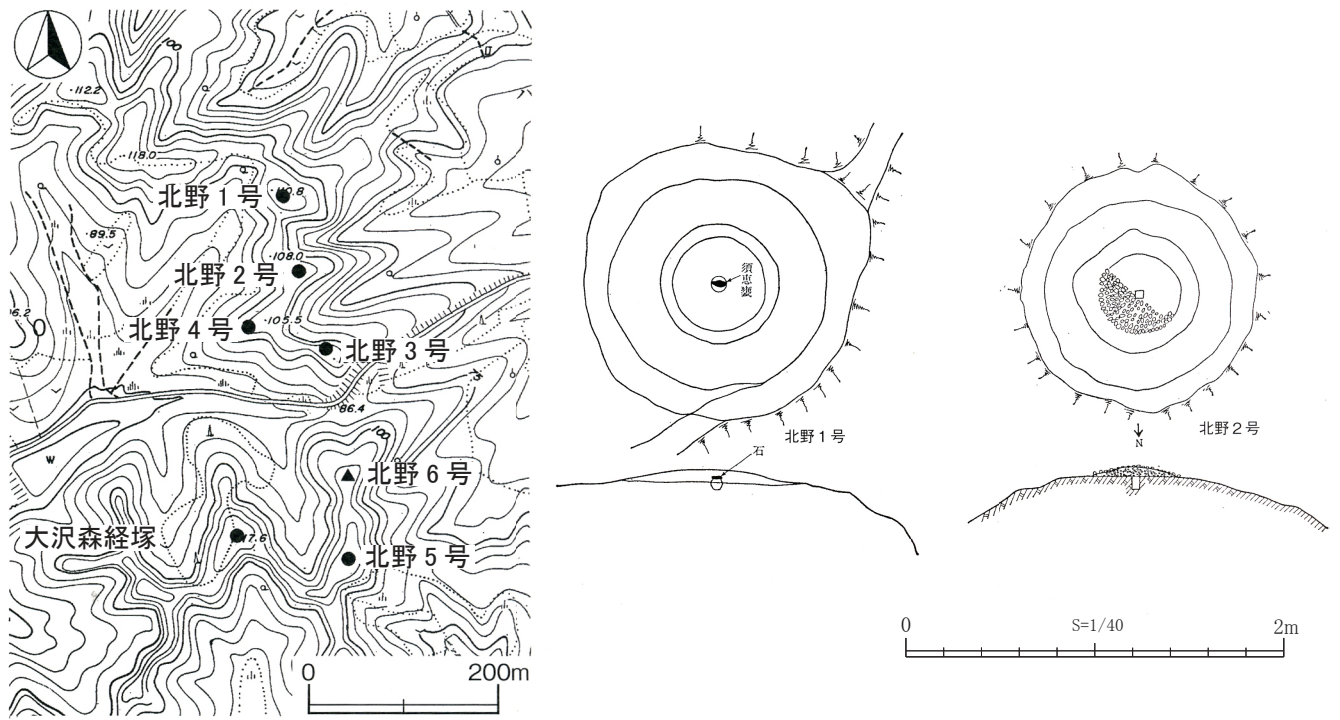


図5 セツ森経塚群各経塚の位置と北野1・2号経塚遺構実測図 (横手市 2007)

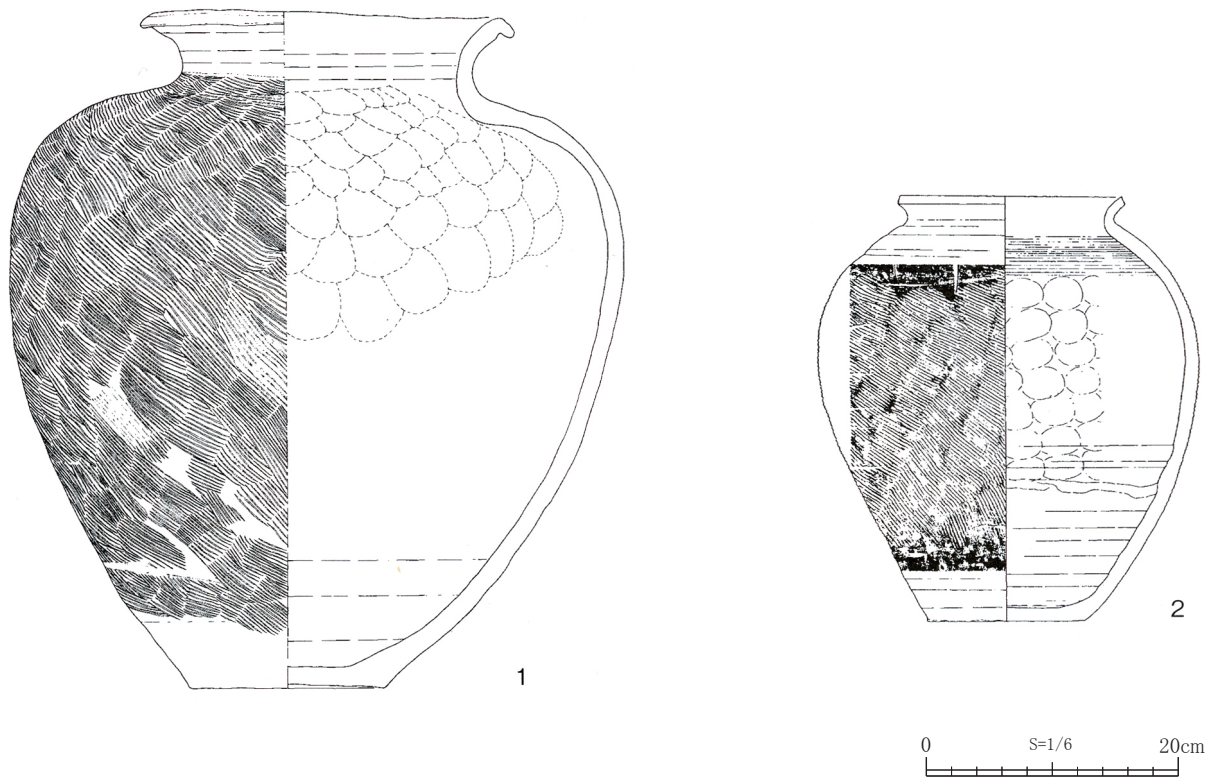


図6 セツ森経塚群出土遺物 (横手市 2007)

員会によって昭和56年(1981)に発掘調査が実施された(雄物川町郷土資料館1985)。規模は南東約9m、東西約7mで、略円形を呈する。塚の外観は北野1号経塚に類似し、整地と盛土による2段構造となり、盛土表面には拳大～人頭大の礫が葺かれていた。塚中央部に径約60cmの円形土坑、西側に長方形の土坑が掘り込まれており、円形土坑底面には径・深さともに20cmほどの小ピットがあり、ここに経典が納められた可能性が推定されている。

遺物は、長方形の土坑から須恵器の甕または壺の口縁部が出土したとされるが所在不明である。

参考文献

内田武志・宮本常一 1976『雪の出羽路』菅江真澄全集第六集 未来社

内田武志・宮本常一 1978『月の出羽路』菅江真澄全集第七巻 未来社

戎谷亀吉 1920『金沢山八幡社神寶図譜』

雄物川町郷土資料館 1985『雄物川町郷土資料館報告書』2

仙南村 1992『仙南村郷土誌』

奈良修介 1977「経塚」『秋田県史』考古編

横手市 2007『横手市史 資料編 考古』

表1 横手市内の経塚

経塚群	市町村	遺跡名	立地	遺構に関する記録	出土遺物	現況・備考
金沢経塚群	横手市	おそのふくる 糶袋経塚	鳥居長根丘陵頂部	-	千体仏(伝)	現在は径約5m、高約1mのマウンドが残る。中央に盗掘坑あり。
		ばらね やま 老姥山経塚	鳥居長根丘陵北西端部	-	石箱・直刀・鉄斧・「大小種々なる破損の古瓶」(伝)	現在は径約5m、高約1mのマウンドが残る。周囲に人頭大の石が露出。
		まがね 直坂経塚	鳥居長根丘陵南西端部、直坂山頂上	「饅頭形を為せる盛土経塚」	鉄製経筒	-
		かんきまがね 閑居長根経塚群	閑居長根丘陵頂部	1号経塚	盛土から約25cmに石室(箕の形をした石と、「井桁」形に組まれた石(一辺60cm程度))。内部中央に四耳壺が納められる。	須恵器系陶器櫛目文四耳壺・蘆雁鏡(県指定有形文化財)、銅線
	2号経塚	塚内部に大きな石(径1m程度)が複数積み、中央の石には10cmほどの穴が穿たれており、内部に経筒が納められる。		梅枝双雀鏡・銅製経筒(元久三年(1206)紀年銘)(県指定有形文化財)	-	
美郷町	いちじやま 一字山経塚	一字山と呼ばれる山地、西向きの細尾根上	-	石櫃・経筒(仁安三年(1168)紀年銘)・法華経(伝)	現在は尾根上にマウンドが7つ存在。石室が確認でき、人頭大の石が露出。経塚中央に径1.5mほどの盗掘坑あり。	
観音寺経塚	横手市	かんのんじ 観音寺経塚	1号塚	軟質の岩盤を掘りくぼめた中に経筒を納め、その上に鞘付きの太刀を置き、周囲に川原石を詰めて大きめの石で蓋をし、その上に盛土。	銅製経筒(久安5年(1149)紀年銘)・太刀(伝)	このほか塚がもう1基があったとされる。
2号塚			-	須恵器系陶器中型壺、銅製経筒(伝)		
3号塚			-	太刀(伝)		
七ツ森経塚群	横手市	大沢森経塚	出羽丘陵上の見晴らしの良い丘陵尾根頂部・端部	-	須恵器系陶器甕、銅製経筒小破片・紙本経(伝)	昭和59年(1984)に復元整備。
		北野1号経塚		平坦面を径14mほどの円状に切土・整地。中央部に高40cmほど盛土し、表面に拳大の礫が葺かれる。塚中央に土坑が掘り込まれ、須恵器系陶器大甕が正位で納められ、凝灰岩の切り石で蓋がなされる。	須恵器系陶器大甕	昭和59年(1984)に復元整備。
		北野2号経塚		1号経塚とほぼ同様だが、盛土面に葺かれず、盛土中に礫が含まれる。塚中央部に一辺45cm、深さ70cmの方形土坑が掘られ、黒色土が充填。	石製人形	昭和59年(1984)に復元整備。
		北野3号経塚		-	男根状石製品	貯水小屋が建てられ、塚自体は消滅か
		北野4号経塚		-	-	昭和59年(1984)に復元整備。
		北野5号経塚		南東約9m、東西約7mの略円形。塚の外観は北野1号経塚に類似。塚中央部に径約60cmの円形土坑、西側に長方形の土坑が掘り込まれる。	須恵器甕か壺の口縁部(伝)	昭和59年(1984)に復元整備。
		北野6号経塚		-	-	『横手市史』編纂時の現地踏査で発見。